

特 集

コミュニティの再生・創生と宗教

旅する文化を生きる人々 —スペインのブラジル系キリスト教会—

山田政信¹

移民受け入れ国となったスペインではプロテスタント教会のラテンアメリカ化が進む。出稼ぎを目的に移住したブラジル人はどのような社会的要因と力学によって彼らの教会コミュニティを生んでいるのだろうか。

¹ やまだまさのぶ：天理大学国際学部教授

はじめに

スペインの地中海に面したバルセロナ市。観光客で賑わうランブラス通りにはたくさんの土産物店が並び、タパスやパエジャの専門店には連日溢れんばかりの人が訪れる。しかし、土産物店ではインド人かモロッコ人、レストランやホテルではエクアドル人やコロンビア人のように、たくさんの外国人が働いているということにどれくらいの人が気づいているだろう。観光産業は、今や外国人の移民によって支えられているのだ。スペインはラテンアメリカを征服した歴史を持つことで知られるように移民輸出国だった。しかし、今では移民輸入国に様変わりしている。

このような傾向が顕著になったのは2000年に入ってからのものである。1998年に外国人人口は全人口の2%以下で欧州共同体のなかでも低かった。しかし、2005年にはその4倍を超える8.5%を記録した(Juan 2006)。人の移動は宗教の移動も促す。バルセロナ市の宗教を調査したマルティネス・アリニョらは、イスラームの増加もさることながらプロテスタントの増加が目立つようになったという(Martines-Ariño 2011)¹⁾。バルセロナ自治大学のマール・グリエラらは、それは主としてラテンアメリカからの移住者によってもたらされたもので、プロテスタント教会のラテンアメリカ化が進んでいると指摘する(Griera i Garcia-Romeral 2010)。そのなかでもブラジル系プロテスタント教会は注目に値するといえるだろう。

スペイン国家統計院 (Instituto Nacional de Estadística) によれば、2016年現在のスペインの全人口46,438,422人のうち、外国人は4,418,898人で9.5%となっている。中南米出身者ではエクアドル人が最も多く(410,517人)、コロンビア(354,108人)、アルゼンチン(249,467人)、ボリビア(168,994人)、ブラジル(116,068人)と続く。ブラジル出身者は決して多いといえないが、ブラジル系プロテスタント教会は、中南米やアフリカ諸国、スペイン、ポルトガルをはじめとするヨーロッパ諸国、そして日本にも移民を通じて受容されており、宗



写真1 様々なラテンアメリカ出身者が集まるプロテスタント教会（バルセロナ市）

教的プレゼンスでは他のラテンアメリカ諸国を抜きんでいる（Oro et al. 2003）。

ブラジルといえばカトリック国だという印象を持つ読者は多いだろう。しかし、今日ではプロテスタント教会の活動が目立っている。同国の有力新聞社による調査（データフォリャ 2013 年）によれば、国民に占めるカトリック信者の割合は 57% で、プロテスタント信者は 28% である²⁾。数字を見れば前者が後者をはるかに上回るが、実態はそうだとは言いがたい。というのもカトリックには名目的な信者が多く、プロテスタントには熱心に活動する信者が多いという評価があるからである。ある研究者はミサに参加する信者はカトリック全体の 3 分の 1 程度だろうという。

第三世界のプロテスタント教会研究の第一人者として知られるポール・フレステンは、ブラジルでは国内で生まれた独自の教会が 20 世紀以降急速に伸展してきたという。彼はそれらの展開を現在に至るまで 3 つの時代に区分し、すべてペンテコステ派（後述）だと指摘する（Freston 1998）。第 1 期（1910 年以降）には、アメリカからの宣教師や信者が教えを伝え、独自の発展を遂げた。第 2 期（1950 年以降）には、工業化によって都市化した南東部に移動した大衆が教会群を作り上げた。第 3 期（1970 年以降）には、マスメディアの活用や政界進出に

積極的でグローバルに展開する巨大教団群が生まれた（山田 2004）。

第3期の教会群については筆者も含めブラジル内外の研究者による膨大な研究蓄積がある（山田 2004, 2005, 2007; Corten 2001; Oro et al. 2003）。しかし、第1期のCongregação Cristã・クリスタン教会（Congregação Cristã³以下、Congregação教会とも表記）は、ブラジルのプロテスタント教会で2番目の信者数を誇り、ブラジル人移民を中心に国外でも展開しているが、これまでほとんど注目されてこなかった。この教会はオーケストラによる伴奏付きの集会を開き、世界最多の楽器演奏者人口を誇るという極めてユニークな特徴を持っている。そこで本稿は同教会を取り上げ、スペインへの進出とその宗教コミュニティの生成のありようを考察する。

以下、本稿は次のように構成される⁴。1章ではペンテコステ運動の誕生と移民との関わりを考察し、2章でCongregação教会の設立とブラジルにおける伸展の要因を論じる。3章では同教会の諸外国への展開とスペイン進出の社会的要因を整理し、4章では教会ネットワークを活用して移動する人々の姿と、彼らが生み出す教会コミュニティのありようを論じる。そして、5章では信者の具体的な素顔を紹介し、共通する特徴を明らかにすることで教会コミュニティを生み出す力学を探る。

1. ペンテコステ運動とディアスポラ

プロテスタント神学者ハーヴィ・コックスは、今日のペンテコステ運動を新たな宗教改革（New Reformation⁵）と呼び、キリスト教界の中心はもはやヨーロッパにではなく、グローバル・サウス（the global South）と呼ばれる第三世界に移動したと述べている。その実践者は、20億人を超えともいわれる全世界のキリスト教信者の4分の1を占め、現在も急速に増えている（Cox 2011: xvii-xix）。

ヨーロッパで起こった古い宗教改革は、ローマ教皇の權威を問い、俗信徒に教会權威に参加する機会を与え、神のみへの信仰と労働に励むことが来るべき時の救済をもたらすと説いた。しかし、今日の新たな宗教

改革は現世における神の王国の到来を強調し、特に社会的権利が奪われがちな人々に正義と尊厳を与えることを救済の第一義とする。それは、病気の治癒や経済的富という現世利益をもたらすという⁶⁾。

そもそもペンテコステ運動は 20 世紀初頭のアメリカ合衆国で始まった (Cox 1995)。聖書 (使徒言行録第 2 章) には、五旬節 (ペンテコステ) の日、神に祈りを捧げていた人々に炎の舌のようなものが下りてきて聖霊に満たされたという再生の体験 (聖霊のバプテスマ) が記されている。1906 年、米国各地を旅行して説教を続けていた黒人のウィリアム・ジョセフ・シーモア (William Joseph Seymour) が、ロサンゼルスで黒人の家事使用人らを集めて集会を行っていた。その時人々の間で聖書の記述のような体験が起こり、喜びに満たされた人々が低所得者層の白人やメキシコ人らにも広めていったという。

この運動はすぐに国境を越えた⁷⁾。その理由は米国で運動に参加するようになった移住者らが自身のホームランドに伝えたからだった。当時の社会的周縁に位置づけられがちな人々が宣教の役割を担ったといえる。こうした事態についてフレストンは、ペンテコステ派の世界伝播のありようはディアスポラによる「下からのグローバリゼーション (a globalization from below)」だと指摘する (Freston 1998: 72-82)。

ラテンアメリカのペンテコステ運動は、都市化が加速化した 1950 年代以降急速に増加し、1980 年代には全地域に広がって、2000 年には人口の 12% を占めるようになった (Freston 2008: 15)。世界最大のカトリック信者数を有するブラジルでは 1990 年代に受容者が急増し、2000 年には国民の 15.4% になっている (Jenkins 2011: 73)。人数は米国に次いで世界で 2 番目である (Freston 1998: 82)。このような伸展の理由には、都市化による貧困の問題があるが (山田 2004, 2005, 2007)、先述したように国内および国外への人の移動を見逃すことはできない (Jenkins 2011; Rocha and Vásques 2013)。

ここで、「ディアスポラ」を自らの国家や居住地を離れて暮らす人々という意味に加えて、ギリシャ語の原義 (diaspeirein) に倣って「(文化を) 拡散する人々」と理解することにしたい (Rocha and Vásques

2013: 3)。ロビン・コーエンは、ディアスポラは「国民文化」と「旅する文化」の間に位置するという（コーエン 2001: 220）⁸⁾。本稿の主演となるグローバル時代のディアスポラは、二つの文化の境界線上に立ちながらトランスナショナルなアイデンティティを様々な地域に増殖させているのである（Freston 1998: 82）。

では、彼らはどのようなコミュニティを生むのだろうか。石黒馨は、コミュニティは社会関係資本を基礎に形成されるとし、農村型、都市型、脱伝統的、の三つのタイプを析出している（石黒 2014: 9）。ロバート・パットナムによれば、社会関係資本とは社会的ネットワーク・互酬性・信頼であり、結束型と橋渡し型に分けられる（パットナム 2006: 14）。そもそもコミュニティは結束型を軸に同質的な人々によって形成され、橋渡し型をもとに外部社会との関係を広げる（石黒 2014: 9）。本稿との関わりでいえば、グローバル時代のディアスポラは橋渡し型社会関係資本に長け、結束型が弱いコミュニティを形成する。それは前近代的な農村型コミュニティでもなく、近代的な都市型コミュニティでもなく、ポストモダンの脱伝統的コミュニティである。その特徴の一つは、確固たる帰属先を持たないメンバーの移動の多さに見て取れる。それを本稿では流動的なコミュニティと呼ぶ。

2. コングレガソン・クリスタン教会⁹⁾

ブラジルにおけるペンテコステ派教会の歴史は、1910年に生まれたコングレガソン・クリスタン教会の設立に始まる。同教団は、1911年に生まれたアセンブレイア・デ・デウス教会（以下、アセンブレイア教会とも表記）に次ぐブラジルで2番目の信者数を誇る。アセンブレイア教会はいつくかの分派に分かれ、常に単立教会を生んでいる。しかし、コングレガソン教会は創設以来分派を出さず、後述するように独自の伝統を頑なに守ってきた。

当初、この教団はブラジル南部に住むイタリア人移民の間で広がり、国内の人口移動によってブラジル全土に広まった。20世紀後半にはブ



写真2 コングレガソン教会の外観（バルセロナ市）

ラジルからの出移民やブラジルに渡った移民の末裔を通じてグローバルに展開している。その意味で、コングレガソン教会はペンテコステ派教会が生み出される要因としての人の移動という特徴をよく表している。

創設者ルイス・フランセスコン（Luis Francescon）は1866年にイタリアで生まれた。彼が青年期を過ごしたイタリアは統一運動のさなかにあり、外国に移住する者が多かった。彼は24歳で親戚がいるアメリカに渡り、シカゴのイタリア人植民地で生活を始めた。カトリック信者だったがバプテスト教会の集会に参加するようになり、1907年に聖霊のバプテスマを授かった。彼が通っていた教会には、後にブラジルに渡ってアSEMBレイア教会を創始したダニエル・ベルグもいた。

1910年、フランセスコンは南米に移住した同胞に教えを伝えることを目的に、アルゼンチンとブラジルに渡った。ブエノスアイレス市とブラジル南東部のパラナ州に住む知人を訪問したのち、サンパウロ市のブラス地区で一時滞在を始めた¹⁰⁾。この地区にイタリア人移民の工場労働者がたくさん住んでいたためである。フランセスコンは長老派の教会¹¹⁾に通い始めたが、彼の影響を受けた人々と共に独自に集会を持つようになった。集会はコングレガソン・クリスタンと命名された¹²⁾。

コングレガソン教会の伸展要因をマクロレベルで眺めると人口移動に依るところが大きいことがわかる（Monteiro 2010: 154）。1930年代以

降、ブラジル南東部のサンパウロ市では工業化による近代化と都市化が進んだ。それ以降、ブラジルの北部や北東部からの人の移動が顕著になり、1960年代からさらに増加した。一定期間をサンパウロの工場で働くなかでCongregação教会に入信し、やがて出身地に戻っていった人々が結果としてブラジル全土に伝えることになった。すなわち、この教会は近代国家として萌芽期を迎えたブラジルの都市部で生まれ、近代化の波に押されて各地に伸展していったのである。

ブラジルのペンテコステ派教会は一般的に布教に熱心で、宣教師だけでなく信者も宣教を行うことが期待されている。しかし、Congregação教会の場合は街頭での宣教演説は行わないばかりか、テレビやラジオといったメディアを利用することもない。信者向けの教内文書でさえ集会で使われる讃美歌集と1937年から年1回発行されている『報告書(Relatório)』(内容は主として教会住所録)のみである。

集会のありようにも独自性が際立つ。男性はスーツとネクタイ、女性は長髪で薄化粧、そしてベールをかぶることが望ましいとされる。集会開始まで女性信者がエレクトーンで穏やかなメロディーを奏で、男女は別々に座って私語は慎まれる。集会が始まると、男性信者によるオーケストラを伴奏に、落ち着いたゴスペルが歌われる。一方、アセンブレイア系の多くの教会では服装が自由であるほか¹³⁾、ゴスペルはエレキギ



写真3 集会に出席した女性信者たち(サバデル市)

ター、ドラム、キーボード等を用いて賑やかである。コングレガソンの信者はこのように独自のアイデンティティを継承しており、伝統的かつ保守的で静かな印象を与える。

3. コングレガソン教会の諸外国への展開と スペイン進出の要因

先述したように、布教活動は多くのブラジルのペンテコステ派教会で熱心である。しかし、コングレガソン教会のある教会役職者が、目立った布教活動は自惚れにつながると筆者に語ったように同教会では活発とはいえない。教団の拡大をもたらしているのはむしろ信者の地理的移動に依るところが大きいといえる。同教会は、南北アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、そして日本でグローバルに展開しているが、それらは信者の移動がもたらしたものである。

教会数はブラジル国内に約1万7千カ所ある（2007年）。南米には527カ所あり、そのうちパラグアイが273カ所と最も多く、その次は87カ所のアルゼンチンである。二つの国はブラジルと隣接しており、容易な人口移動が教会数を増やした。中米には13カ所、北米69カ所（合衆国55カ所）、ヨーロッパ274カ所（スペイン91カ所）、そして日本には23カ所の教会が存在する（表1）。

信者の地理的移動は主として経済的理由によるもので、出稼ぎか帰国である。たくさんの移民を迎え入れたブラジルでは、出稼ぎの就労先と

表1 コングレガソン教会の教会数の推移

国名	1997	2002	2007
ポルトガル	118	123	129
イタリア	21	21	25
スペイン	11	23	91
合衆国	25	40	55
日本	5	16	23

出典：Monteiro（2010）より筆者作成

して先祖の祖国を選ぶことが多い。言葉が話せたり、国籍を持っている場合があるからである。就労先の生活に慣れるとそのまま定住するケースも見られる。信者らはグローバルに拡散して教会を設立していったが、彼らはホスト社会で経済的かつ社会的に周縁的な位置に立ちやすい。Congregacion教会の世界展開はまさに下からのグローバリゼーションの一例といえる¹⁴⁾。

さて、ブラジルをはじめ中南米は1980年代に経済危機に見舞われ、「失われた10年」を経験した。そのころブラジルから北米を目指す移住者が増えた¹⁵⁾。彼らの多くは中産階級で、1984年に実現した民主化に期待しつつも、ハイパーインフレがもたらした悲観主義に苛まれ、祖国に裏切られたと感じた人々が多かった(Masanet y Padilla 2010)。彼らに外国への移住を促したのは、壮絶な貧困や政情不安というよりも少しでも落ち着いた生活がしたいという希望だったといえる。

ここで、スペインにおけるブラジルからの出稼ぎ現象を確認しておこう。スペインは1986年に欧州共同体に加盟したのち経済状況が好転した結果、第三諸国から移民が流入するようになった。2000年からは不動産ブームが起これ、建設業やサービス業で労働力が不足。高齢人口の増加と相まってアフリカや中南米から労働者が増加した¹⁶⁾。1991年のシェンゲン協定への加盟で欧州域内での移動が自由になったこともあり、既にポルトガルで働いていたブラジル人のなかには、賃金格差を理由にスペインに移動する人もいた。

スペインで働くブラジル出身者は1970年代頃からみられた。その多くがミュージシャンか接客業で働く女性だった。90年代半ばからは、建設業、サービス業、そしてホテル業に従事する労働者が増えはじめた。彼らのなかには、スペインに家族や親戚、知人がいる者も少なくなかった。マサネットらは、社会的ネットワークが移住を促す重要な要因になったと指摘している(Masanet y Padilla 2010: 75)。後述するように、筆者の調査でも親戚や信者のネットワークを頼りにスペインに移動したCongregacion信者は多い。

また、中南米出身者は観光目的なら査証を取る必要がない。そのた

め、観光気分で冒険するかのようになり、とりあえず行ってみようといった軽い気持ちで渡航し、結果的に長期滞在する者もいる。2008年にポルトガルで行われる学会に出席する目的でマドリードのバラハス空港を降りたブラジル人女性が入国拒否、強制退去されるという事件が起こった¹⁷⁾。この事件は外交問題になりかけたが、2006年ごろから強制退去者が増えていたという状況がある¹⁸⁾。しかし、スペインでは外国人排斥を支持する政治的な運動はあまりみられない (Arango 2013)。

建設業、サービス業、ホテル業に従事する移民労働者の場合、観光ビザで入国したのちに超過滞在となる者が多い。しかし、住民登録 (エンパドロナミエント) をすれば外国人法 4/2000 の定めるところによって人権が保証される。これにより健康保険証の交付や義務教育を受ける権利を得ることができる¹⁹⁾。

スペインのブラジル人は、2005年の人口比でカタルニア州 (21.7%)、マドリード州 (18.8%)、バレンシア州 (9.8%)、アンダルシア州 (9.3%)、ガリシア州 (8.6%) と続いており、ほぼこれらの州に集住している (Masanet 2008: 157)。ところが、ブラジル人の実数を把握するのは難しい。スペインとの二重国籍者はカウントされないからである。ちなみに、2008年にスペインで働くブラジル人国籍の人々で雇用保険に入っていた人数は約 153,000 人だった (Masanet e Baeninger 2011: 70)²⁰⁾。

なお、スペインにおいて移民にたいする批判は、イベリア半島南端やカナリア諸島にパテラと呼ばれる小舟で漂着する北アフリカからの不法移民が対象になることが多く、中南米出身者が問題視されることは希である (渡辺 2006)。ブラジル人の場合は陽気で明るいとポジティブに評価されることが多く (Solé et al. 2012)、バルセロナ市の一人のインタビューは、ネイマールといったサッカー選手がブラジル人のポジティブな印象に一役買っていると語る²¹⁾。

コングレガソン教会の諸外国への伸展は、こうしたブラジルからの出移民に依るところが大きい。しかし、そもそもブラジルは 19 世紀以降にヨーロッパと日本から多くの移民を受け入れた国だったことも考慮す

表2 ブラジルへの移民総数（1836年から1968年）

出身地(国籍)	移民の数
ポルトガル	176万人
イタリア	162万人
スペイン	71万9千人
ドイツ	25万7千人
日本	24万3千人
ロシア	11万9千人

出典：Milesi and Andrade（2010）

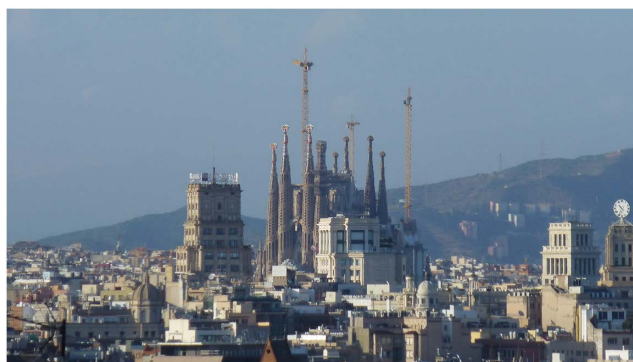


写真4 信者宅から見えるサグラダ・ファミリア教会（バルセロナ市）

る必要がある。表2にあるように、ブラジルはポルトガル、イタリア、スペインから最も多くの移民を受け入れた。移民のなかには種々の理由で母国に戻った還流移民もいた。スペインをはじめヨーロッパのコングレガソン教会の設立には、そうした移民やその子孫も少なからぬ影響を与えている。

ここで、教会数の推移（表1）とブラジルへの移民総数（表2）をあらためて比較してみよう。1997年に教会数は移民総数の順に並んでいるが、10年後にはスペインと日本がイタリアを追い抜いている。この頃、これら二つの国でコングレガソン教会が着実に伸展したことが見て取れる。その理由は、還流移民も含めた移民そのものの増加に他ならない。

4. スペインへ／のなかを／から「旅する」 コングレガソン教会信者

スペインの信者を取りまとめる立場にある同教会のジョゼップ・マッソ氏によれば、信者の8割は2000年前後に移住してきたブラジル出身者だという。スペインには、北西部ガリシア州（1959年から）、大西洋カナリア諸島（1974年から）、東部カタルニア州（1985年から）という3つの地方に伸展の系譜がある。ガリシア州とカナリア諸島にはブラジルに移住したのち出身地に帰還したスペイン人が伝え、カタルニア州にはブラジルで2年間放浪し、その旅の終わりに信者になったジョゼップ氏が核になった。しかし、いずれの地域でも活動が活発化するのは2000年以降である。

筆者は、2015年9月と2016年8月にガリシア州ビゴ市とカタルニア州バルセロナ市、同州サバデル市、および地中海のイビサ島で、22名の信者を対象に半構造化インタビューによる聞き取り調査を行った。かつて中南米に多くの移民を輩出したビゴ市とその近郊の町の教会では、スペイン人を祖先に持つ信者の割合が他の地域に比べて多く、夫婦のみまたは子供連れでの移住が目立つ²²⁾。サグラダ・ファミリア教会をはじめとするガウディの諸建造物で有名なバルセロナ市とその近郊の町の教会でも夫婦の移民は多いが、男性単身者の割合も高い。それぞれの地域には400名ほどの信者がいると見られる。イビサ島は活動が始まって1年足らずで、信者数は10人程度である。1組の夫婦を除くと男女ともに単身者である。

スペインのブラジル人移民に関する先行研究では、単身者の移民に占める女性の割合が男性を上回るが（Cavalcante 2012）、コングレガソン教会では逆である。女性信者は夫婦で移住する傾向が強いようである。あくまでも筆者の想像にすぎないが、その理由はおそらくコングレガソン教会の女性信者に求められる男性への従順さと慎ましさという伝統的な価値観が関わっているように思われる。

どの教会でも共通するのは、2008年のリーマンショックを境に信者

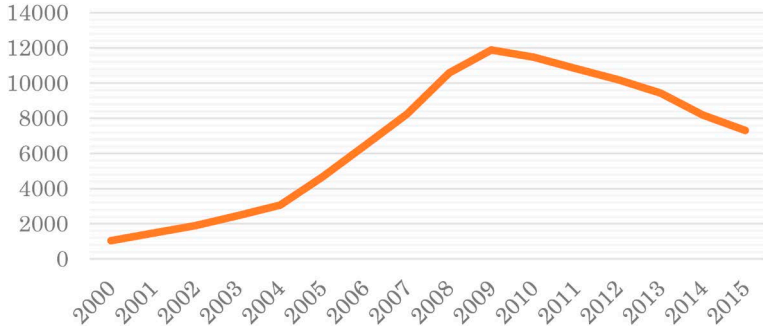


図1 ブラジル人人口の推移 (ガリシア州)

出典：Instituto Galego de Estadística da Xunta de Galicia (www.ige.eu) より筆者作成

数が減少したことである。それは、スペインにおけるブラジル人移民の数の推移と連動していると思われる（図1参考）。しかし、最近では一旦ブラジルに帰った人々が再移民する事例も見かけられる。アメリカ合衆国のブラジル移民を調査したマルゴリスは、こうした振り子のように行っては戻る還流移民をヨーヨー・マイグレーションと呼ぶ（Margolis 1994）。

ガリシア州ビゴ市の教会信者の記憶を頼りに、ここ5年間の信者の動向を探ってみた。すると、100家族以上はいたであろう信者のなかから34家族（100名）が帰国し、11家族（34名）が戻ってきている。ブラジルに戻らずに第3国に再移住したケースもある〔イギリス2家族（8名）、アメリカ1家族（2名）〕。そして、4家族（10名）が新たに移住してきた。こうしてみると彼らの教会は、メンバーの流入と流出が当然のことと理解される流動的なコミュニティになっていることがわかる。

教会コミュニティの流動性は移住という人の動きに見て取れるが、実はそれだけではない。教会の役職者や信者の訪問である。長老²³⁾には、年間を通じてかなりの頻度で様々な国や地域の教会を訪問する者がいる²⁴⁾。また、年に一度、ヨーロッパとブラジルの300名ほどの長老が一堂に会する大会がポルトガルで開かれる。大会日の前後にはそこに参加した様々な地域の長老がポルトガルやスペインの教会を訪問して集会



写真5 集会に参加した信者に食事を準備する女性信者たち（ビゴ市）

を行う²⁵⁾。また、若者の大会もスペインや他のヨーロッパ圏各地で開催され、様々な国や地域の若い信者らが大勢集まる。そして、長期休暇にはスペイン国内やヨーロッパを旅行して、訪問地に教会があれば集会に参加するという信者が少なからずいる。

こうして「旅する文化」を担う信者たちは異なる地域の信者と親交を深め、より大きな教会コミュニティに包摂されるという意識を生む。多くの場合、彼らは信者宅で寝泊まりする。こうした活動は信者間の親密性と信頼を醸成し、教会ネットワークを拡大する。

5. 信者の素顔

ここで、どのような人が教会に繋がっているのか具体的な姿に触れてみたい。ただし、信者の典型的なプロフィールを示すことが目的ではない。信者一人一人の人生行路は全く異なり多様性に満ちている。ここでは、①単身での移民、②還流移民、③夫婦での移民という基本的と見られる三つのパターンを紹介することにした。

- ① 単身での移民 Aさん（37歳男性、滞在歴15年、大学中退、結婚によりスペイン国籍取得）

ブラジルの貧しい信者家庭で育ち、小学生のころからアルバイトで家計を支えた。青年になり、ハーレーダビットソンでブラジルからアメリカまで旅行する夢を抱いたが、そんなお金はブラジルで稼げない。ポルトガルで働いていた友人にヨーロッパで仕事をすれば夢が叶うと聞き、叔父（信者）が短期の出稼ぎでバルセロナに来ていたこともあり、2001年に物見遊山の気持ちで来た。叔父に教会の長老を紹介してもらい、長老が以前住んでいたアパートで同じような境遇のブラジル人信者とルームシェアした。

観光ビザでは正規に就労できないという知識さえなかったが、他の出稼ぎの信者に日雇いの仕事を紹介してもらって12年間いろんな建設現場で働いた。6年目には自営業者として社会保険を払うようになり雇用形態を正規化した。お金がたまったらブラジルに帰るつもりだったが、教会で知り合ったスペイン人女性と2005年に結婚。長い間失業したこともあったが、教会からお金や食料を援助してもらった。

2012年には教会の若い信者らでアフリカ（コンゴ民主共和国）に行き、教会建物建設の手伝いをした。現地で知った極端な貧困にショックを覚え、食に関わる仕事に就こうと考えた。バルセロナに戻って料理学校に通い、ハンバーガー店を開業。予想以上の反響を得て年々売り上げが伸び、市内で注目すべき店として『エル・パイス紙』に掲載してもらうほど経営は順調である。教会では執事という立場にある。

② 還流移民 Bさん（46歳女性、滞在歴17年、大学院卒業、家系によりスペイン国籍取得）

Bさんは祖父の代からの信者家庭である。彼女はブラジルで大学院修士課程を二つ修了し、スペインの大学で博士課程に進学する予定で1999年に入国。祖父がアンダルシア州出身のブラジル移民だったためスペインでの滞在資格に問題はなかった。教会があり祖父の知り合いの長老が住んでいるという理由でガリシア州を選んだ。同時期、ブラジルから来た信者の独身女性がいたので二人でアパートを借りて生活。そのうちにスペイン人男性と知り合って結婚した。生活費を稼ぐ必要性和子育てに迫られ、最近大学院を中退。スペイン人家庭の清掃を週に数回

行っている。夫は木材伐採の仕事に従事。住居は市営の低所得者用アパートで、妹一人も同居している。教会にはなるべく行くようにしているが、Bさん自身はあまり熱心ではないという。

Bさんを追うように両親と6歳年の妹も1999年に移住。この後、Bさんを起点としたチェーンマイグレーションが始まる。2年後には二人の弟夫婦と妹夫婦の3家族が移住した。約1年間、彼らはBさんのアパートでルームシェアした²⁶⁾。妹夫婦は3年間ビゴ市で生活したが、稼ぎがいいという理由でロンドンに再移住した。彼らはロンドンで教会に繋がっている。2番目の弟夫婦は家を購入して借金を抱えたため、夫は高い収入を求めてスイスに働きに行き、家族はビゴ市に残っている。

2005年にはBさんの二人の甥が健康を理由に移住。ブラジルで気管支炎を患っていたが、ビゴ市に来てから良くなった。2006年に彼らの両親(1番下の妹夫婦)が移住。他の移民同様、彼らも雇用契約の結べる仕事はすぐには見つからず、車で1時間ほどの国境を越えたポルトガル人の邸宅で、夫婦で庭仕事を3カ月続けた。信者からの紹介だった。それから後、ブラジルで長距離トラック運転手だった夫は市内の運搬業で職を得ることができ、妻は5軒のスペイン人家庭で家政婦をしている。彼女は「貯金はできないがブラジルにいるときよりも豊かな生活ができています。ブラジルでいい生活ができるなら、誰もスペインには来ない」と語る。夫は教会オーケストラの責任者、妻はエレクトーン奏者である。

③ 夫婦での移民 Cさん(49歳男性、滞在歴10年、小学校卒)

Cさんはカトリックの家庭に生まれ、31歳の時に友人に勧められて夫婦で入信した。ブラジルでは借金のない落ち着いた生活をしていましたが、Cさんが突然移住を提案。教会で知り合った人の義理の姉妹(信者)を頼りにバルセロナに2006年に移住した。どんな仕事があるのか、仕事ができるかどうかなどは考えず、とにかく来た。その信者にアパートの1部屋のみを借りてもらい、そこで知り合いになった信者らとルームシェアした。冒険だったが、仕事は探せばすぐに見つかるほど景気が良かった。移民もどんどん入ってきていた。



写真6 集会後の教会内の様子（ビゴ市）

Cさんがスペインに来て1年4カ月後に妻と二人の子供が観光ビザで入国。今も正規の就労資格はなく、インフォーマルセクターで働く。建設現場の左官、電気の配線、水回り等、頼まれたことなら何でもする。妻はスペイン人家庭で家政婦。二人ともブラジルの社会保険を続けて払っており、スペインでは未加入である。住民登録をしている特権として、子供たちは義務教育を修了。長男は大学工学部、次男は技術高校に在学中である。授業料は決して安くはないものの、子供たちがアルバイトをしてくれているので助かっている。将来もできるならスペインで生活が続けたい。医療保険や住居など、ブラジルで望めないことがスペインでは容易に手に入るからだ。ブラジルは生活が不安定で治安も悪いが、ここでは無理なことを思わない限り夢は叶う。

バルセロナ市は家賃が高いので今は郊外に住んでいる。これまで単身でブラジルからやってきた、会ったこともない信者を宿泊させたこともあった。神の愛を感じるからこそ、困っている人ならば家を開放するのがクリスチャンの信仰だからだ。今住んでいるアパートの近辺にはブラジル人が多い。そのうち信者家族は17軒ほどになっている。学校（義務教育）にはブラジル人児童が多いので子供を育てる環境として望ましい場所といえる。妻の職場（清掃で訪問する家）も近いし、なによりも教会が近い。週に3回は教会に行くのでガソリン代が安くつく。生活

に余裕はないけれども、子供たちには世界を広げてもらいたい。子供の幸せを願うのは親の役目。だからスイスやマドリードで行われた若者の集会に参加させた。

信者の素顔から次の六つが共通点として抽出できる。①宿泊場所や仕事を探す際に信者である親戚や友人のネットワーク（教会ネットワーク）が使われる。②定住ストラテジーとしてまずは信者同士でルームシェアを行い、自立できるようになると同じ地区やアパートに集住することがある。その際、教会が重要な繋留点となる。③困っている信者には教会や信者個人が経済的・物質的支援を行うことがある。（ただし、教会では支援を受けた人の氏名等を公表しない。）④より良い条件を求めてヨーロッパ圏内を移動する場合があるが、その際にも可能な限り教会ネットワークを活用する。⑤ほとんどが観光ビザで入国するがスペインでは住民登録による得点（保護）を受けすることができる。⑥職種では男性は工事現場、女性は個人宅での家政婦が多い。インフォーマルセクターで働くことが多いものの、正規雇用は無理ではない。

さて、共通点の①から④は、信者らが共有する信頼と互酬性という社会関係資本によって成立し、逆にそれらは社会関係資本を新たに生み出す原動力になっている。このうち、②は結束型社会関係資本、①、③、④は橋渡し型社会関係資本として機能して、スペイン（ヨーロッパ圏）で生き抜くスキルを不案内な移民に与える。これら四つの共通点はコングレガソンという教会コミュニティを生み出すうえで重要な要因であると同時に、彼らのコミュニティの主たる特徴といえることができるだろう。

おわりに

本稿を執筆するにあたって実施した調査旅行で、筆者は4軒の信者宅で宿泊と食事をお世話になった。いずれのご家庭も初対面で異邦人の筆者を快く受け入れてくださった。あるご家庭は、筆者が到着した日の

夜、自分の家だと思って自由に過ごしてくださいと言い残し、筆者を一人残して家族全員で長期休暇の旅行に出かけた。通常、全幅の信頼なくして見知らぬ他人に家の鍵を預けることはありえない。筆者を信じてくださった根拠には、彼らに絶対の安心を与えてくれる神への全き信頼があるからだろう。

Cさんが語ったように、彼らは可能な限りイエスの愛に応えようと誰にでも誠心誠意で尽くそうとする。筆者は図らずもその恩恵を受けた一人だったに過ぎない。調査旅行という一時的な「旅する文化」にいた筆者は、「旅する文化」を日常のなかで生きている人々に支えられた。彼らはブラジル文化とスペイン文化の間合いを生きながら、特定のエスニシティを超えようとする「旅する文化」と様々なエスニシティを抱き込もうとするクリスチャンという意識において筆者を受け入れてくださったのだった。

コングレガソン教会は、人の移動を所与のものとして生まれ、それによってメンバーを増やす歴史を刻んできている。ブラジルで近代化が本格化するようになった時期に誕生したこの教会は、ジグムント・バウマンが現代社会を液状化というメタファーで形容するずっと以前から、ポストモダンのとさえ感じられる流動性を原動力として生まれ、保ち続けているようである。信者らは帰属のシステムを分解しながらも、独自の方法で作り直す術を知っている。流動性が高まるグローバル社会では、特定のコミュニティに帰属し続けることは難しい。彼らはそのような現代社会にオルタナティブなコミュニティを提供してくれる人々なのかもしれない。

付記 本稿は平成28年度科学研究費助成事業（基盤研究（C）「スペインにおけるブラジリアン・ディアスポラの宗教実践に関する実証研究」）による研究成果の一部である。

参考文献

- 石黒馨「グローバル社会におけるコミュニティの創造」(石黒馨・初谷譲次編『創造するコミュニティ』、晃洋書房、2014年)、1-24頁。
- コーエン、ロビン『グローバル・ディアスポラ』駒井洋監訳、明石書店、2001年。
- バウマン、ジグムント『リキッド・モダニティー—液状化する社会』森田典正訳、大月書店、2001年。
- パットナム、ロバート『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』柴内康文訳、柏書房、2006年。
- 山田政信「ブラジルにおけるネオペンテコスタリズムの伸展」(『宗教研究』第342号、2004年)、71-92頁。
- 「〈帝国〉と宗教—ブラジル・プロテスタント教会の成長戦略」(天理大学アメリカス学会編『アメリカス世界のなかの「帝国」』、天理大学出版部、2005年)、111-124頁。
- 「ブラジル・ユニバーサル教会の取り込み戦略—取り込まれたプロテスタント信者」(石黒馨・上谷博編『グローバル化とローカルの共振—ラテンアメリカのマルチチュード』、人文書院、2007年)、142-163頁。
- 「デカセギ・ブラジル人の宗教生活—エスニックネットワークの繋留点としてのブラジル系プロテスタント教会」(三田千代子編著『グローバル化の中で生きるとは—日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし』上智大学出版、2011年)、195-222頁。
- 「在日ブラジル人の宗教コミュニティ—越境するプロテスタント教会」(石黒馨・初谷譲次編『創造するコミュニティ』晃洋書房、2014年)、61-87頁。
- 渡辺和男「スペインの移民問題—中南米寄りの移民動向分析」(『神戸大学経済学研究年報』第54号、2006年)、85-105頁。
- Ari Oro Pedro, André Corten e Jean-Pierre Dozon (org.), *Igreja Universal do Reino de Deus*, Paulinas, 2003.
- André Corten, Ruth R., Marshall-Fratani (eds.), *Between Babel and Pentecost: Transnational Pentecostalism in Africa and Latin America*, Indiana University Press, 2001.
- Carlos Velazco Juan, "El impacto de la inmigración en España: consideraciones generales", *Migraciones. Reflexiones cívicas*, 2006. <http://www.madrimas.org/blogs/migraciones/2006/05/12/22082> (2016.8.19. 最終アクセス)
- Carlota Solé et al., *La inmigración brasileña en la estructura socioeconómica de España*, Ministerio de trabajo e inmigración, 2012.

- Cristina Rocha and Manuel Vásquez et al., *The Diaspora of Brazilian Religions*, Brill, 2013.
- Erika Masanet, “O Brasil e a Espanha na dinâmica das migrações internacionais: um breve panorama da situação dos emigrantes brasileiros na Espanha”, *Revista brasileira de estudos de população*, v. 25, n. 1, São Paulo, 2008, pp. 151–165.
- Erika Masanet y Beatriz Padilla, “La inmigración brasilina en Portugal y España. ¿Sistema migratorio ibérico?”, *Obets. Revista de Ciencias Sociales*, v. 5, n. 1, 2010, pp. 49–86.
- Erika Masanet e Rosana Baeninger, “Brasileiros e brasileiras na Espanha: mercado de trabalho, seguridade social e desemprego”, *Revista Paranaense de Desenvolvimento*, n. 121, 2011, pp. 59–83.
- Harvey Cox, *Fire from Heaven: The Rise of Pentecostal Spirituality and the Reshaping of Religion in the Twenty-First Century*, Da Capo Press, 1995.
- Harvey Cox, “Foreword”, Candy Gunther Brown (ed.), *Global Pentecostal and Charismatic Healing*, Oxford University Press, 2011, pp. xvii–xxi.
- Joaquín Arango, *Exceptional in Europe? Spain’s Experience with Immigration and Integration*, Migration Policy Institute, 2013.
- Julia Martínez-Ariño, María M. Griera, Gloria García-Romeral y María Forteza, “Inmigración, diversidad religiosa y centros de culto en la ciudad de Barcelona”, *Migraciones*, n. 30, 2011, pp. 101–133.
- Leonardo Cavalcante, “La inmigración brasileña en España”, Padilla, Beatriz et al. (org.), *Novas e Velhas Configurações da Imigração Brasileira na Europa: Actas do 2o Seminário de Estudos sobre a Imigração Brasileira na Europa*, ISCTE—Instituto Superior de Ciências do Trabalho e da Empresa, 2012, pp. 7–13.
- Mar Griera i Glòria Garcia-Romeral, “Immigració i comunitats religioses a Catalunya”, *Immigració, religions i societat*, PPU, 2010, pp. 167–199.
- Maxine L. Margolis, *Little Brazil: An Ethnography of Brazilian Immigrants in New York City*, Princeton University Press, 1994.
- Paul Freston, “Latin American Dimensions”, Hunchinton, Mark and Kalu, Ogbu (eds.), *A Global Faith: Essays on Evangelicalism & Globalization*, The Centre for the Study of Australian Christianity, 1998.
- Paul Freston (ed.), *Evangelical Christianity and Democracy in Latin America—Evangelical Christianity and Democracy in the Global South*, Oxford University, 2008.

- Philip Jenkins, *The Next Christendom: The Coming of Global Christianity*, Oxford University Press, 2011.
- Rosita Milesi and William Cesar de Andrade, *Migrações internacionais no Brasil Realidade e Desafios contemporâneos*, Instituto Migrações e Direitos Humanos, 2010, <http://www.gritodelosexcluidos.org/media/uploads/migracionesintbr.pdf> (2016.5.17. 最終アクセス)
- Yara Nogueira Monteiro, “Congregação Cristã no Brasil: da fundação ao centenário: a trajetória de uma igreja brasileira”, *Estudos de Religião*, v. 24, n. 39, 2010, pp. 122–163.
- Vanda Maria Leite Pantoja e Leandro Araújo da Silva, “Uma interpretação dos reflexos da secularização no campo pentecostal: Congregação Cristã no Brasil e Assembleia de Deus em Imperatriz—MA”, *Revista de geografia e interdisciplinaridade*, v. 1, n. 2, 2015, pp. 204–224.

注

- 1) バルセロナ自治大学の調査によれば、2014年におけるカタロニア州のイスラーム寺院は256カ所であるのに対して、プロテスタント教会数は725カ所である。<http://www.mapareligios.cat/uploads/7/3/4/0/73408179/evangelics.pdf> (2016年8月19日アクセス)
- 2) *Jornal Mundial de Juventude*, “População católica no Brasil cai de 64% para 57%, diz Datafolha”, 2013 (2016年5月13日アクセス) <http://g1.globo.com/jornada-mundial-da-juventude/2013/noticia/2013/07/populacao-catolica-cai-de-64-para-57-diz-datafolha.html>
- 3) スペインでは、*Congregación Cristiana* と表記される。
- 4) 筆者は2015年9月(バルセロナ市)と2016年8月(バルセロナ市、ビゴ市、イビス島)にて現地調査を実施したほか、日本から電子メールや電話による補完的なデータ収集を行った。
- 5) この運動については宗教社会学者アンドレ・コルテンらも「新たな宗教改革」と呼んでいる (Corten and Marshall-Fratani eds. 2001)。
- 6) さらに伝統的なプロテスタント教会では認められない特徴として、「異言」と呼ばれる理解不可能な言葉を発し、神の第三位格である聖霊が自身の身体に宿る「聖霊のバ

「プロテスマ」という賜物を授かると説く。

- 7) 最も早くは1907年の南米チリへの伝播である。その2年後に誕生したプロテスタント教会は、現在、同国で最大の規模に成長している (Freston 1998: 73)
- 8) コーエンは、ユダヤ人伝説に始まるディアスポラの古典的概念を考察したうえで、被害者ディアスポラ、労働ディアスポラ、帝国ディアスポラ、交易ディアスポラ、文化ディアスポラ、グローバル時代のディアスポラというように類型化している。
- 9) 本章の記述は、Monteiro (2010) および Pantoja e Silva (2015) に依っている。
- 10) 現在、ここに設置された教会が教団の行政局として機能している。
- 11) ブラジルでは、奴隷制廃止と自由貿易を求めるイギリスからの政治的圧力により1850年ごろから長老派やメソジスト派等のプロテスタント教会の設立が認められていた。
- 12) 教団の設立は1910年とされる。
- 13) 教会によって異なるが、かつてはコングレガソン教会のようなドレスコードがあった。
- 14) コングレガソン教会のみならず、それ以外の多くのブラジル系プロテスタント教会も似通った展開をしている。日本の事例としては、山田 (2011, 2014) を参照。
- 15) Margolis (1994)
- 16) ほとんどがインフォーマルセクターでの就労となるが、入国後3年を経ると就労資格を取得して正規雇用になれる可能性がある。
- 17) 筆者のインタビューのなかにもマドリッドで入国を拒否された後ブラジルに戻り、再度フランス経由で入国したというケースがみられた。
- 18) <http://www.publico.es/internacional/indignacion-brasilenos-trato-reciben-espana.html> (2016年9月7日アクセス)
- 19) 非正規滞在者への健康保険証交付は国王令16/2012により却下されたが、その後も交付している州がある。
- 20) ブラジルからの実際の移民はこれよりも大きな数字であることは明らかである。
- 21) しかし、外国人差別は皆無ではない。バルセロナではブラジル人がスペイン語で話しかけても、公用語のカタロニア語でしか返答しないという嫌がらせを受けたインタビューもいる。
- 22) コングレガソン教会では信者リストを作成しないため、正確な数字の把握はできない。ここでの記述は、代表的な信者への聞き取りによる。
- 23) 長老とは名誉職で一般信者の代表である。このほか執事、協力者という役職もある。
- 24) なお、コングレガソン教会には牧師と呼ばれる立場の者はおらず、役職者らは無俸給で活動している。また、信者にはいわゆる十一税と呼ばれる献金の義務もない。これらは他のプロテスタント教会と異なる点である。

- 25) 筆者が参与観察を行った2016年8月29日のサバデル教会の集会、同30日のバルセロナ教会の集会にはベルギーの長老が参加し、ポルトガル語で御言葉を伝えた。彼はベルギー人だが同国のコングレガソン教会にもブラジル人が多いため、言葉が堪能になったという。
- 26) 入国してすぐの移民は家族や友人のネットワークを伝手にルームシェアを行う。アパートの1部屋に1家族住み、自立できるまで数家族共同で生活することが多い。独身の場合、ルームシェアは常態化している。